

化学療法中の乳癌患者における生活の質および感情プロフィール : 乳癌検診受診者との比較検討

荒井 利夫 (G140001)

指導教員: 佐藤 祐造

キーワード: 乳癌、化学療法、生活の質、QOL、SF-36、POMS2

はじめに

日本において乳癌は年々増加傾向にある。がん情報サービスによる統計結果では、乳癌は1996年から女性の部位別癌罹患率において第一位となり、2000年には罹患患者数が約3万5千人に達している (<http://ganjoho.jp/public/>)。現在、生涯に乳癌に罹患する日本人女性は12人に1人とされている(国立がん研究センターがん対策情報センター)。また、乳癌による死亡者数は、2013年に1万3000人を超え、1980年と比べて約3倍に増加している(「人口動態統計」厚生労働省)。乳癌の好発年齢が40歳代から60歳代であり、家庭や社会において重要な役割を担っている女性の命を奪うことより、乳癌の死亡者数増加は社会問題となっている。

目的

乳癌治療においては、治療効果や生存率だけを重視した医療が中心であったが、最近、患者のQOLを含むアウトカム評価の重要性がクローズアップされてきた。乳癌患者が満足する治療およびケアには、乳癌患者におけるQOL低下の要因を理解することが必須である。今回、外来化学療法中の乳癌患者におけるQOL低下および心理的苦痛の要因を明らかにするために、SF-36およびPOMS2の二つの尺度を用いて、乳癌患者と乳がん検診受診者のQOL及び感情プロフィールについて比較検討を実施した。

方法

対象

平成27年6月15日から平成27年7月31日までにA乳腺専門病院を受診した乳癌患者および乳癌検診の受診者のうち、本研究への参加の同意が得られた合計308名の女性(乳癌化学療法患者45名および乳癌検診受診者263名)を対象とした。

調査方法

自己記入式の質問用紙を直接手渡しで配布し、その場で記入してもらい、回収した。

QOLの調査には、SF-36ver.2 (MOS Short-Form 36-Item Health Survey) (日本語版) を使用し、

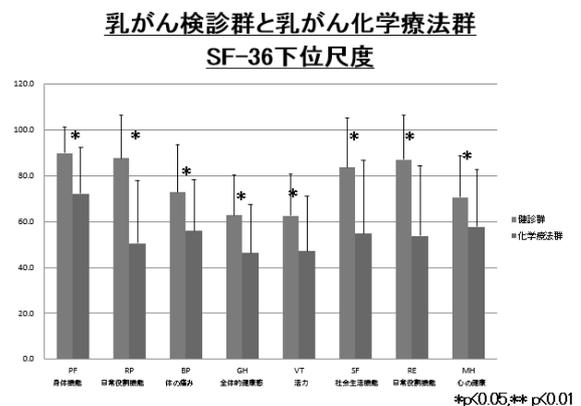
感情プロフィール調査には、POMS2 (Profile of Mood States) を使用した。

結果

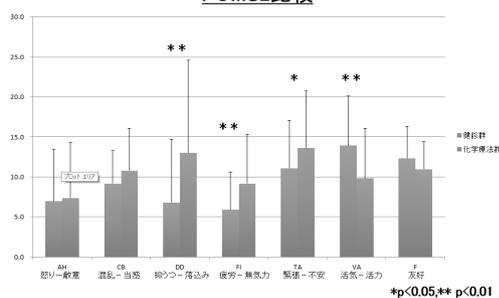
本研究の対象者全308名の平均年齢は55.0±10.1歳であった。また乳癌化学療法群(45名)で54.3±9.6歳、乳癌検診群(263名)で55.2±10.2歳であり、両群間に有意差は認めなかった。

QOLの指標であるSF-36の結果では、8つの下位尺度のすべての項目において、化学療法群で検診群に比較して有意に低い結果であった。感情プロフィールの尺度であるPOMS2の比較では、7つの項目のうち、抑鬱—落込み(DD)、疲労—無気力(FI)、および緊張—不安(TA)の3つの尺度において化学療法群は検診群より有意に高いスコアを示し、一方、活気—活力(VA)では化学療法群は検診群より有意に低いスコアを示した。また、TMD(総合的気分状態)得点では、両群間で有意差を認めなかった。精神的サマリースコアなど一部の尺度をのぞき、化学療法中の乳癌患者におけるQOLの低下およびネガティブな感情プロフィールが確認された。

表1・2



乳がん検診群と乳がん化学療法群
POMS2比較



考察

多くの乳癌患者では、癌の診断自体がうつ状態や不安といった精神症状を引き起こし、QOLを低下させると報告されている。このようなQOLの低下は化学療法のコンプライアンスに影響を与え、ひいては患者の予後を悪化させるとの報告もある。したがって、乳癌患者においては治療効果を優先させるのみならず、適切なQOLを保つことが治療成績を向上するためにも重要である。

本研究では、SF-36ver.2およびPOMS2の二つの尺度を用いて比較検討を加えた。QOLの指標であるSF-36の結果では、8つの下位尺度のすべての項目において、化学療法群で検診群に比較して有意に低い結果であった。サマリースコアについての解析では、PCS (身体的サマリースコア) およびRCS (役割社会的サマリースコア) では化学療法群が検診群にくらべて有意に低いスコアを示したが、一方MCS (精神的サマリースコア) では有意な差を認めなかった。感情プロフィールの尺度であるPOMS2の比較では、7つの項目のうち、抑鬱

—落込み (DD)、疲労—無気力 (FI)、および緊張—不安 (TA) の3つの尺度において化学療法群は検診群より有意に高いスコアを示し、一方、活気—活力 (VA) では化学療法群は検診群より有意に低いスコアを示した。また、TMD (総合的気分状態) 得点では、両群間で有意差を認めなかった。これらの結果より、乳癌化学療法中の患者では身体的および社会的な面でのQOLの低下があり、また感情プロフィールにおいても抑うつ、疲労感や不安感が高く、一方で活気が低下しているといったネガティブな結果であった。一方、過去の報告と異なり、一部の尺度 (精神的サマリースコアなど) では両群間に有意な差を認めなかった。この原因は不明であるが、本研究対象患者に対する当院での精神的支援が比較的充実していた可能性や、ピンクリボン運動の日本における普及に伴う乳癌に対する知識・理解の向上が関与している可能性もある。今回の研究では化学療法に伴う副作用などの臨床情報がないため、副作用とQOLとの関連については検討できなかった。今後の課題としたい。

参考文献

1. 笠原 善郎, 辻 一郎, 大貫 幸二, 鯉淵 幸生, *日本乳癌検診学会誌* 2014, **23**(1):84-97.
2. 島田 菜穂子, 太田代 紀子, 佐久間 浩, 笹 三徳, 宮良 球一郎, 田中 真紀: 日本のすみずみまで乳癌検診を ピンクリボン運動を始めとする全国乳がん啓発活動実態調査 日本乳癌検診学会広報委員会 ピンクリボン活動小委員会予告. *日本乳癌検診学会誌* 2013, **22**(1):82-85.
3. 下妻 晃二郎, 園尾 博司: 癌疾患の QOL 評価 乳癌. *Pharma Medica* 1996, **14**(12):81-87.